

東京日々新聞

八百七十七号



深川西六間堀餅屋渡世
 昔昔與吉三三三音久病の末
 ありが共妻のよみ本年廿五歳と云ふ名小背らす

て来り安らる水性うて夫の甘も鼻へ附らびつら
 小僧監田兼古と人目忍びて寐の子餅裂る殺さへ重ね着る
 夜の衣の度重し若も本夫の全快あさべ一人り中の自在餅
 此快樂へ遠げらばは唯さへ枯るる言昔與吉三三三と勝太くも
 二人りの法を思ふるを薬土瓶へ配劑の毒あうるを此病者あやらるるを
 飯しや否鼻早口眼より血と吐て怒ら没命を為けぬと内いさきみ
 表し裏ひ形の如く野送り誰を憚りの閑守もは真似
 あせりや発覚し遂に警視の支應へ呼ぶと

萬齋芳幾



山より有人誌
 田原く料向あり
 一五ふあり一次第
 十日扶せ一々本月
 九日東京裁判所へ
 送致せらる

具足屋

渡辺彫栄

